

## Column

あのクリスティーズでアジア人初のワインスペシャリストとして活躍した、世界に誇る日本女性の渡辺順子さんがお届けするワインコラムです。

## 渡辺順子のワインに乾杯!

## 第3回

## 前号までの話

テキサス州に住むクリスティーズ上顧客の広大なセラーを訪れた筆者。ワインにモーツァルトを聴かせるために、ハリウッド映画の専門家に音響設備を依頼したという話に、さすがにびっくり……

Wine geek(ワインおたく)の私も面食らった。確かに、イタリアのある葡萄畑で、モーツァルトを流しながら葡萄を栽培している光景をテレビで見たことがある。植物に毎日話しかけると、育ち方が違うと聞いたこともある。花も枯れにくくなるとも言っていた。

私は目に見えない力を信じないわけではない。

私はワインを一生の仕事にしよう決心し、クリスティーズに入った。毎日ワインに囲まれ、ワインのことしか考えず、自他共に認めるワインおたくになったのだが、出来上がったワインにモーツァルトを聞かせるという発想は、全く持っていなかった。

彼のようにワインに対するパッションを持ち合わせていない自分を、恥じるべきか安堵すべきかしらばらく迷ってしまった。もっともこれを、“パッション”と呼んでいいのかも疑問だ。実は、セラー内でディナーをするという突拍子のないアイデアを聞いた時点から、少し迷い始めてはいたのだ……。

その時の迷いは、いまだ続いているわけだが、これだけの広さがあっても10万本ものワインは全部納まりきらず、残りはニューヨークの倉庫に保管しているという。



紹介が遅れたが、彼の家は曾祖父がヨーロッパからテキサスへの移民で、金融と貿易で巨万の富を得た。名画好きの彼の一家とクリスティーズは、150年ほどの付き合いがあるようだ。彼は多くを語らないが、中西部ではかなりの名士の家らしく、昔は大きな牧場を所有し、親戚が石油を掘り当てたことがあったと聞いた。テキサスといえば、41代と43代のアメリカ大統領を輩出した

ブッシュ一族のお膝元でもある。

「本当は今の倍の広さのセラーを作れば、ニューヨークに倉庫を借りなくても良かったんだが、ジョージの大統領選の寄付金に使ってしまってね」と冗談まじりに話していた。

圧倒的に民主党が占めるニューヨークで、気軽にそんな冗談が言えるのも、私がニューヨーク州民といえ、やはりアジア人だからなのだろう。上流階級の白人社会にいて差別を感じたことがないわけではないが、どこにも属さない中立な立場が、たまに心地良かった。



クリスティーズはイギリスのロンドンに本社を構えており、NY支社にも数多くのイギリス人が勤務しているのだが、一緒の職場にいと、アメリカ人とブリティッシュは何十年、何百年経っても、肌が合わないんだなと感じることが多い。

それぞれ、「感性のないアメリカに何がわかる」「お金のないイギリスに何が出来る」と言わんばかりか、そこへフランス人が入るものなら、「フランスは歴史以外何があるのか?」という態度が見てとれる。

オフィスで毎日繰り返されている、どこまでジョークでどこまで本気かわからない彼らの会話を、私は大変興味深く聞いていた。



渡辺順子(わたなべじゅんこ)

1989年、ニューヨーク移住。ニューヨーク大学に通う傍ら、日系企業に勤務しファッション関連の会社を設立。「シャトー・ペトリュス」を飲んでワインに魅せられ、ワイン留学のため渡仏。NYに戻り、2001年より世界最大オークションハウス、ニューヨーク・クリスティーズでアジア人初のワインスペシャリストとして活躍。2009年に退社し、ワイン・コンサルタントとして株式会社FIFTHに所属。韓国、NY、日本でワインのセミナー、イベントを開催。欧米のコレクターやワイン商と取引し、アジア諸国に向けて事業展開する。アメリカソムリエ協会 ソムリエ認定、パリコルドンブルー ワインプログラムのサティファイケイト、ボルドープロフェッショナルワイン協会 ディプロマ、WSET アドバンス サティファイケイト  
<http://www.winewiki.jp> <http://wine.choippin.com>